

国際交流・協力等ネットワーク会議が オンラインで開かれました

井澤修美(事務局長)・晴山紗希(習志野市協働政策課)

1月21日(金)千葉県と(公財)ちば国際コンベンションビューロー主催の「令和3年度国際交流・協力等ネットワーク会議」がオンラインで開催されました。

まず千葉県の国際課やちば国際コンベンションビューロー、国際協力機構 JICA の事業説明があり、その後、「外国にルーツを持つ子供、若者の現状」というテーマで、ペルーから中学2年生の時に来日した、上村 寿安 カルロスさんのミニセミナーがありました。千葉県では、県内外国人が増加傾向にある中、「千葉県多文化共生推進プラン」を令和2年3月に策定し、令和4年度が最終年度になります。今後はプラン改定のためパブリックコメントを行う予定とのことです。また、令和3年度に「千葉県日本語教育推進事業プラン」を策定し、令和4年度も事業を拡充し、推進していく予定です。

さらに、令和3年10月1日から2日、台風16号が発生した際には「災害時多言語支援センター」を設置。多言語による情報発信を行い、市町村窓口への通訳支援や、市町村が外国人等向けに発する情報の翻訳を支援しました。

ちば国際コンベンションビューロー(CCB)は、国際交流・多文化共生事業の他にも映画・ドラマ撮影支援(フィルムコミッション)、スポーツツーリズム支援(スポーツコンシェルジュ)などの事業を実施しています。CCBには国際交流ボランティアとして1,250人以上のボランティアが登録していますが、やはりコロナの影響で活躍の場面が少ないということでした。

また、在住外国人の支援として外国人相談事業を13か国語で実施しています。例年は

年間千件程度の相談があるそうですが、令和2年度は1,639件、うち419件がコロナ関連ということです。今年度も昨年並みの相談件数がきているそうです。やはり母語で相談ができるということは、在住外国人にとっては本当に頼もしいことだと思います。

カルロスさんは、来日当時、全く日本語ができず、特別支援学級に通っていたそうです。いじめや差別がある中でボランティアの大学生に出会い、勉強を教えてもらって高校に合格したこと、両親がペルーに帰国しても一人日本に残り、アルバイトで生計を立てていたこと、日本と南米をつなぐ仕事がしたいと思い、中南米専門の旅行会社に勤務することとなったことなど、ご自身の体験を中心に、外国にルーツを持つ子どもは多様な文化に対する耐性があり、壁を乗り越えることで培う生き抜く力や発想力をもっているということをおっしゃっていました。

ミニセミナーの後は、参加団体が4つの分科会に分かれて情報交換を行いました。

- (1) 災害時の外国人支援について
- (2) 外国人の教育・進学支援について
- (3) 地域における外国人キーマンの発掘・育成について
- (4) SDGs と国際交流・多文化共生について

テーマ(3)「地域における外国人のキーマンの発掘・育成について」

イベント時の外国人の集客方法やキーパーソンの発掘の仕方について意見交換を行いました。各団体とも、外国人のコミュニティを作りたいという方が多く参加していましたが、どこも苦労しているようでした。

このグループには外国人ゲストとしてベト

ナム出身の方とベネズエラ出身の方が参加されていましたが、外国人といかに交流を持っていくかということについてお二人の話がとても参考になりました。まずイベント等が外国人の興味をひくものかどうかということ、そして「ボランティア参加証」など参加したことによるプラスアルファがあると協力者は増えていくのではないかということでした。また、情報発信はSNSの活用が非常に有効で、ホームページよりもフェイスブック、文字だけではなく動画の投稿が効果的だそうです。

テーマ（4）「SDGs と国際交流・多文化共生について」

各団体が受けた外国人からの相談を紹介し、SDGs のどのターゲットに該当するか協議しました。また、国際協力や地域活性化に尽力している「特定非営利活動法人 自然塾寺子屋」から、地域活動と外国人のかかわりつ

ての事例や JICA の外国における取組みが紹介されました。

SDGs への取組は、普段の活動がおのずとターゲットに分類できるため特別意識する必要はありませんが、より活動の幅を広げるため、身近な活動事例を SDGs の観点から見直す機会を設けることは非常に大切であること、また、現在のような対面交流が難しい状況下においてもオンラインを活用して、国際交流が途切れないようにしていく努力が必要であることを再確認しました。

この会議は、行政や国際交流協会などが協力し、県内に住む外国人と日本人が安心してネットワークをつくること目的として開催しています。県内他団体の情報や事例を共有するとともに、これを機に新たな横のつながりもつくることができたのではないかと思います。